



ARTIST
SUPPORT

【アーティストサポート】を通して、
アーティストたちの活動をご支援いただき、ありがとうございます。
時や国を超え「生きる力」を与えてくれる文化・芸術に、
引き続きのご支援をお願い申し上げます。

ご支援をいただいた個人ならびに企業・団体の皆さま

<2023年度年間サポート>

F.A 今井良成 S.U 植原由起子 S.U M.E A.O K.O S.O 河村はるみ K.K
木村美明 M.K 小室秀夫 新貝康司 N.S M.S A.D 土屋涼子 トゥルーラブ真智子
トゥルーラブ真凜 N.N 中島 和 中野和枝 中村尚義 中村美穂 T.H M.H 藤野盾臣
細沼康子 M.H 松尾芳樹 松田 香 三橋祐太 J.M H.M S.Y
TDK株式会社 コンツェルトハウス・ジャパン by 株式会社キタマ
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント 株式会社ロジックアンドエモーション
ライフプラン株式会社 Heart of the Earth株式会社
ナレッジワーカーズインスティテュート株式会社 株式会社RINABO きづきアセット株式会社
株式会社青林堂 日本パデレフスキ協会淡路

(匿名希望 22名)

<館野泉バースデープロジェクト>

Y.A 阿部将任・登美子 A.I 大谷恵美子 S.O 小畑裕子 M.K 黒川智恵美 黒住彰子
斉藤久子 坂井 和 菅原佳世子 鈴木早苗 中村康江 福島晶子 松田純子 三上美智恵
光永 育 K.M 山家七恵 S.Y 館野泉ファンクラブ 日本セヴラック協会 有限会社ムジカーザ

(匿名希望 13名)

<ニュークラシックプロジェクト>

浅岡尚子 岩井陸雄 上原啓子 小田島容子 K.K 久保千聖 雲然祥子 小池美喜
篠崎啓史 I.S T.S トゥルーラブ真智子 トゥルーラブ真凜 T.N 長谷部 宏行 秦 勝重
T.H 林 路郎 細沼康子 牧野佳那 松下泰之(マティビ) S.Y

(匿名希望 14名)

2023年8月31日現在 敬称略/匿名希望の方は記載していません

ご支援についての詳しい内容は、どうぞ下記へお問い合わせください。

株式会社ジャパン・アーツ アーティストサポート係 Tel.03-3499-7720

(平日11:00~17:00 年末年始を除く)

アーティストサポートの
詳細はこちらを
ご覧ください。



TOMOKI
SAKATA



阪田知樹

ラフマニノフ・ピアノ協奏曲全曲演奏会

Tomoki Sakata Rachmaninov the complete piano concert

大井剛史(指揮) 東京フィルハーモニー交響楽団(管弦楽)

2023年9月17日(日) 13時30分開演

サントリーホール

1:30p.m., Sunday, September 17, 2023 at Suntory Hall

主催：ジャパン・アーツ

Program

オール・ラフマニノフ・プログラム All Rachmaninov Program

ピアノ協奏曲第1番 嬰へ短調 Op.1

Piano Concerto No.1 in F-sharp minor, Op. 1

第1楽章：ヴィヴァーチェ	1st Mov.: Vivace
第2楽章：アンダンテ	2nd Mov.: Andante
第3楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ	3rd Mov.: Allegro vivace

ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 Op.18

Piano Concerto No.2 in C minor, Op. 18

第1楽章：モデラート	1st Mov.: Moderato
第2楽章：アダージョ・ソステヌート	2nd Mov.: Adagio sostenuto
第3楽章：アレグロ・スケルツァンド	3rd Mov.: Allegro scherzando

* * *

ピアノ協奏曲第4番 ト短調 Op.40

Piano Concerto No.4 in G minor, Op.40

第1楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ	1st Mov.: Allegro vivace
第2楽章：ラルゴ	2nd Mov.: Largo
第3楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ	3rd Mov.: Allegro vivace

パガニーニの主題による狂詩曲 Op.43

Rhapsody on a Theme of Paganini, Op.43

* * *

ピアノ協奏曲第3番 ニ短調 Op.30

Piano Concerto No.3 in D minor, Op.30

第1楽章：アレグロ・マ・ノン・タント	1st Mov.: Allegro ma non tanto
第2楽章：インテルメッツォ、アダージョ	2nd Mov.: Intermezzo. Adagio
第3楽章：フィナーレ、アラ・プレーヴェ	3rd Mov.: Finale. Alla breve

ごあいさつ

本日は、ご来場下さり、誠にありがとうございます。

生誕150年、そして、没後80年という偉大な作曲家ラフマニノフにとって特別な年に
このような機会を頂けたこと、感謝申し上げます。

皆様は作曲家ラフマニノフに対してどのようなイメージを持っておられますでしょうか。
チャイコフスキーの影響を大きく受け、交響曲第2番、ピアノ協奏曲第2番、
前奏曲 嬰ハ短調といったロマンティックな作品を書いた作曲家、
或いは、ショパンやリストの影響を受けて難しい技術を盛り込んだピアノ曲を多く遺した
作曲家でしょうか。そのどちらも正しいですし、ラフマニノフの重要な特徴であると
私自身も思います。しかし、ラフマニノフの作品はそれだけではない魅力があります。

ロシア時代の作品とは異なる魅力が表れているアメリカに渡ってからの作品は、
残念ながらその他の作品群に比べて演奏機会に恵まれているとは言い切れません。
例えば今回演奏する楽曲の一つである第4番Op.40は、そんな作品の一つです。
これまでのラフマニノフ作品にみられるような耳に残る旋律や華やかなピアノ技術に加えて、
近代的な響きとリズムを聴くことができます。
ラフマニノフの全ピアノ協奏曲を弾く今日という日を、私は一生忘れることはないでしょう。

本日に一緒に演奏して下さる指揮の大井剛史様、東京フィルハーモニー交響楽団の皆様、
そして、会場でお聴き下さる皆様にとっても一生忘れることのない一日となったら嬉しいです。

阪田 知樹

Profile



© Ayuset

阪田 知樹(ピアノ)

Tomoki Sakata, Piano

2016年フランチ・リスト国際ピアノコンクール(ハンガリー・ブダペスト)第1位、6つの特別賞。コンクール史上、アジア人男性ピアニスト初優勝の快挙。「天使が弾いているようだ!」-Leslie Howard-と審査員満場一致、圧倒的優勝を飾る。

2021年世界三大音楽コンクールの一つ、エリザベート王妃国際音楽コンクールピアノ部門にて「多彩な音色をもつ、知性派ヴィルトゥーゾ」-Standaard-と称えられ第4位。

第14回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールにて弱冠19歳で最年少入賞。「清澄なタッチ、優美な語り口の完全無欠な演奏」-Cincinnati Enquirer-と注目を集める。

イヴァン・モラヴェッツ氏より高く評価されイヴァン・モラヴェッツ賞、ピティナ・ピアノコンペティション特級グランプリ、聴衆賞等5つの特別賞、クリエヴァンド国際ピアノコンクールにてモーツァルト演奏における特別賞、キッシンゲン国際ピアノオリンピックではベートーヴェンの演奏を評価され、日本人初となる第1位及び聴衆賞。

レナード・スラットキン、アレクサンドル・ラザレフ、ヤン・バスカル・トルトゥリエ、ヴラディーミル・ヴァーレック、アンドレア・バッティストーニ、ヤーン・シュ・コヴァーチュ、サッシヤ・ゲツツェル、スタニスラフ・コチャノフスキー、尾高忠明、大植英次、広上淳一、大野和士、他諸氏の下、シュターツカペレ・ハレ、ソフィアフィルハーモニー管弦楽団、チェコ国立交響楽団、ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団、ベルギー国立管弦楽団、フォートワース交響楽団、NHK交響楽団、東京都交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、読売日本交響楽団、他と共演。東京クワルテットメンバー、ブレンターノ弦楽四重奏団との共演など室内楽奏者としても活躍。

国内はもとより、世界各地20カ国以上で演奏を重ね、国際音楽祭への出演多数。クレムリン音楽祭では、オール・リスト・プログラムによるリサイタルをニコライ・ペトロフ氏が「世界一のリスト」と絶賛。クライバーン・ショパン・フェスティバルでのオール・ショパン・プログラムによるリサイタルは、「ヴィルトゥオージティ、天性の叙情性、ピアノに対峙する真摯な姿が聴衆を感動の渦に巻き込んだ!」-Fort Worth Star-Telegram-と高評を得た。2018年には、ドイツの名門ライブツィヒ・ゲヴェントハウスにてリサイタルデビューを果たす。2022年2月、神奈川フィルハーモニー管弦楽団とのピアノ協奏曲での弾き振り、及びリストの管弦楽作品日本初演の指揮を行った。

作曲・編曲活動では、横浜アーツフェスティバル実行委員会より委嘱を受け、横浜音楽祭2019オープニングコンサート(於:横浜みなとみらい大ホール)にて初演されるなど、初演再演の機会に恵まれている。音楽之友社より2022年5月に阪田知樹ピアノ編曲集「ヴォカリーズ」、23年7月には「夢のあとに」が出版。

2015年CDデビュー、2020年3月、世界初録音を含む意欲的な編曲作品アルバムをリリース。内外でのテレビ・ラジオ等メディア出演も多い。

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校、及び同大学を経て、ハノーファー音楽演劇大学にて学士、修士首席修了、現在同大学院ソリスト課程に在籍。世界的ピアニストを輩出し続ける「コモ湖国際ピアノアカデミー」の最年少生徒として認められて以来、イタリアでも研鑽を積む。パウル・パドゥラ＝スコダ氏に10年に亘り師事。作曲を永富正之、松本日之春の各氏に師事。2017年横浜文化賞文化・芸術奨励賞受賞。2023年第32回出光音楽賞受賞。



© K.Miura

大井 剛史(指揮)

Takeshi Ooi, Conductor

1974年生まれ。17歳より指揮法を松尾葉子氏に師事。

東京芸術大学指揮科を卒業後、99年同大学院指揮専攻修了。若杉弘、岩城宏之の各氏に指導を受ける。96年安宅賞受賞。スイス、イタリア各地の夏期講習会においてレヴァイン、マズア、ジェルメッティ、カラブチエフスキーの各氏に指導を受ける。

2000年～2001年、仙台フィルハーモニー管弦楽団副指揮者。

2007年～2009年、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団にて研修。

2008年アントニオ・ペドロッチ国際指揮者コンクールで第2位入賞。

2009～16年ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉(現・千葉交響楽団)

常任指揮者、2009～13年山形交響楽団指揮者、2013～17年同正指揮者を歴任。現在、東京佼成ウインドオーケストラ正指揮者。このほかほとんどの国内主要オーケストラを指揮し、多彩なレパートリーとその誠実な指揮でいずれも高い評価を得ている。

オペラ分野では、在学中より新国立劇場、東京二期会などのオペラ公演で副指揮者を務め、2002年「ペレアスとメリザンド」(ドビュッシー)を指揮しデビュー、以降多くのオペラ作品を指揮するほか、ミュージカル「ウエスト・サイド・ストーリー」(バーンスタイン)も指揮。バレエ分野では「ロメオとジュリエット」(プロコフィエフ)などで新国立劇場バレエ団の公演を度々指揮、国内を代表するバレエ団やダンサーが一堂に会した「NHKバレエの饗宴」でも指揮を務めた。さらに、小松原庸子スペイン舞踊団や、野村萬斎、花柳壽輔、井上八千代といった日本舞踊界の名手たちと共演するなど、幅広い舞台芸術分野で活躍している。

東京芸術大学音楽学部器楽科非常勤講師(吹奏楽)。尚美ミュージックカレッジ専門学校客員教授。

東京フィルハーモニー交響楽団

Tokyo Philharmonic Orchestra



© 上野隆文

1911年創立。日本で最も長い歴史をもつオーケストラ。メンバー約160名、シンフォニーオーケストラと劇場オーケストラの両機能を併せもつ。名誉音楽監督にチョン・ミョンフン、首席指揮者アンドレア・バッティストーニ、特別客演指揮者にミハイル・プレトニョフを擁する。

Bunkamuraオーチャードホール、東京オペラシティコンサートホール、サントリーホールでの定期演奏会や「渋谷/平日/休日の午後のコンサート」等の自主公演、新国立劇場等でのオペラ・バレエ演奏、『名曲アルバム』『NHKニューイヤーオペラコンサート』『題名のない音楽会』

『東急ジルバスターコンサート』『NHK紅白歌合戦』『いないいないばあ!』などの放送演奏の他、各地学校等での訪問コンサート等により、全国の音楽ファンに親しまれる存在として、高水準の演奏活動とさまざまな教育的活動を展開している。海外公演も積極的に行い、国内外から高い評価と注目を集めている。

2020～21年のコロナ禍における取り組みはMBS『情熱大陸』、NHK BS1『BS1スペシャル 必ずよみがえる～魂のオーケストラ 1年半の闘い～』などのドキュメンタリー番組で取り上げられた。

1989年よりBunkamuraオーチャードホールとフランチャイズ契約を結んでいる。東京都文京区、千葉県千葉市、長野県軽井沢町、新潟県長岡市と事業提携を結び、各地域との教育的、創造的な文化交流を行っている。

Program Notes

柿沼 唯(作曲家) Yui Kakinuma

20世紀前半を代表するピアニストとして活躍したセルгей・ラフマニノフ(1873-1943)の作品の大部分は、何よりもまず、20世紀前半を代表するヴィルトゥオーゾ・ピアニストだった彼自身のために書かれたものであり、その並はずれた大きな手と超絶的な技巧を発揮させるべく、どれもがピアニスティックな効果に富んでいる。生来のロマンティストであった彼は、聖堂の鐘の音やロシア教会の敬虔な聖歌を愛し、そのメロディーは独特のスラヴの憂愁を湛えている。チャイコフスキーを尊敬し、20世紀という時代を生きながらもロマン派の語法を貫いたラフマニノフの音楽は、聴き手の心にダイレクトに届き、熱狂させるものであるとともに、その技巧曲の数々は腕に覚えのあるピアニストたちの演奏意欲を刺激してやまない。

ピアノ協奏曲第1番嬰へ短調 Op.1

ラフマニノフは全部で4曲の「ピアノ協奏曲」を残したが、その最初の作品であるこの〈第1番〉は、彼がモスクワ音楽院の学生だった1890~91年に、音楽院の卒業試験のために作曲したものである。この作品でラフマニノフは初めて世に認められ、曲は記念すべき「作品1」として出版された。チャイコフスキーの影響が色濃いながらも作品は好評で迎えられ、ラフマニノフ自身も作曲当初は満足していたというが、のちにラフマニノフはこの曲の徹底的な改作を行った。〈第3番〉の完成から約8年後の1917年に改訂されたその版が、今日知られるものである。曲はラフマニノフらしい豪快なピアニズムこそ控えめながら、メロディの歌わせ方や華麗なピアニズムなどに高い音楽性が感じられる。

第1楽章 ヴィヴァーチェは印象的なファンファーレに始まり、すぐに独特の甘美なメロディが登場する。

第2楽章 アンダンテは、幻想的かつ情緒豊かな緩徐楽章。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェは、力強い楽想とメランコリックなメロディが対比され、華麗に全曲を閉じる。

ピアノ協奏曲第2番ハ短調 Op.18

ラフマニノフの最高傑作として、20世紀に書かれたピアノ協奏曲中屈指の人気を集めるこの〈第2番〉は、1901年、ラフマニノフ28歳の時に書かれた。

ラフマニノフはこの作品を書く直前、24歳の時に発表した〈第1交響曲〉の大変な不評が原因で、強度のノイローゼに陥っていた。このピアノ協奏曲は、そのノイローゼから立ち直った彼が最初に書いた作品であり、それはまた作曲家としてのラフマニノフの名を一躍世界に知らしめる最初の成功作となった。この曲に垣間みられるメランコリックな情緒は、その心の病の余波と呼べるものかも知れない。曲は全3楽章からなり、若きラフマニノフのあふれる情熱をたたえた音楽となっている。

第1楽章 モデラート。鐘のような響きの和音がピアノで力強く打ちならされて始まり、情熱に打ちふるえるような第1主題と、甘美で感傷的なメロディーによる第2主題が登場する。

第2楽章 アダージョ・ソステヌート。ラフマニノフ特有の甘美きわまりない音楽。

第3楽章 アレグロ・スケルツェンド。序奏に続いてピアノによる力強い第1主題が提示されたあと、有名な第2主題がオーボエとヴィオラで歌われる。

ピアノ協奏曲第4番ト短調 Op.40

1917年の革命を逃れてロシアを亡命し、翌1918年からニューヨークを本拠にコンサート・ピアニストとして活躍するようになったラフマニノフは、それ以後、創作活動からはすっかり遠ざかってしまう。故郷を失ったことにより作曲への意欲を持てなくなったためともいわれている。親友のピアニストで作曲家のニコライ・メトネルは、そんなラフマニノフにしきりに作曲を勧めたが、「もう何年もライ麦畑のささやきも白樺のざわめきも聞いていない」と語り、筆は進まなかったという。この〈第4番〉は、そんな時期に書き上げられた数少ない作品の一つであり、1926年にフランスで完成された。作曲技巧の円熟が認められる一方、ひたむきな音楽性はやや影をひそめている。曲はメトネルに献呈された。

第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェは、オーケストラとピアノが一体となり、壮大な音楽を紡いでゆく。

第2楽章 ラルゴは、素朴なメロディが繰り返され、昔を懐古するかのようだ。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェは、強烈な響きに始まり、諧謔的な楽想を中心に、多彩に繰り返される。

パガニーニの主題による狂詩曲 Op.43

〈第4番〉と同様に、亡命後のラフマニノフが作曲した作品の一つであり、「狂詩曲」のタイトルが与えられているが、実際にはピアノ協奏曲と同じジャンルに属するものである。夏の休暇を過ごすためにスイスのルツェルン湖畔に建てた別荘で、1934年の夏に作曲された。主題と24の変奏からなり、その主題はパガニーニの有名なく無伴奏ヴァイオリンのためのカプリース〈第24番〉から採られている。この主題はブラームスやリストをはじめ多くの作曲家たちが取り上げているものだが、ラフマニノフはこれをもとに、ピアノの技巧と色彩的なオーケストレーションを駆使し、構成的なアイデアにも富んだ堂々たる変奏曲を書いたのだった。

主題は冒頭に提示されるのではなく、まず短い序奏があり、続いて第1変奏が奏されたあとに軽やかに登場するという、変わった趣向である。また第7、10、24変奏では、ラフマニノフが生涯にわたりこだわり続けた「怒りの日」のメロディが登場する。第18変奏の、全く姿を変えた心揺さぶるメロディは有名で、映画音楽にも使われている。

ピアノ協奏曲第3番ニ短調 Op.30

1907~09年に作曲され、1909年にニューヨークでラフマニノフ自身のピアノで初演されたこの〈第3番〉は、ラフマニノフが「特にアメリカのために作曲した」と語る作品である。この年から翌年にかけてラフマニノフはアメリカで演奏旅行を行い、この協奏曲をマーラーとも共演しているが、この演奏旅行の成功が、8年後のロシア革命の際アメリカに移住するきっかけともなったのだった。

曲は、前作〈第2番〉とよく似た作風がとられているが、書法はいっそう洗練され、ピアノの技巧もより至難なものとなっている。ラフマニノフ特有のロシア的情緒がたっぷりと歌われ、スケールの大きな構成をそなえている点で、〈第2番〉とならぶ傑作と呼べる作品である。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・タントは、全体に暗い情緒が支配的な楽章。

第2楽章 「間奏曲」アダージョは、甘美な歌の音楽。次第に華麗さを増して終楽章へと続く。

第3楽章 アラ・プレヴェーは、力強い第1主題と抒情的な第2主題によるソナタ形式のフィナーレ。